

阿部卓也さん サントリー学芸賞 (社会・風俗部門)

独創的な研究、評論活動に贈られる2023年度サントリー学芸賞の社会・風俗部門に、愛知淑徳大准教授の阿部卓也さん(45)＝写真＝の『杉浦康平と写植の時代 光学技術と日本語のデザイン』（慶応義塾大学出版会）が選ばれた。写真の原理で文字素材の印刷用版下をつくる技術「写真植字」（写植）の1世紀にわたる歴史を、戦後を代表するグラフィックデザイナー杉浦康平さん(1932年生まれ)を中心にたどった。

写植は従来の金属活字と比べ、字間を調整したり、文字を変形できたりと、自由度が高い。邦文の写真植字機は24年に発明され、戦後になって杉浦さん

愛知淑徳大准教授



写植の歴史追究し著作

らの創作の下、大きく発展を遂げた。背景には書籍や広告での需要拡大、よりデザイン性が求められるカタカナの外来語の増加といった要因があった。

阿部さんは学生時代に「仮面ライダー」の怪人のデザインを担当するなど、デザイナーとしての顔ももつ。自身が大学でデザインを学んだ90年代後半、すでに写植はコンピューターによるデータ作成に取って代わられつつあった。だが、役目を終えた書体見本帳の膨大なサンプル文字を眺めるたびに、疑問がわいたという。「写植はどういう技術で、なぜ消えてしまったのか」。書体のデジタル化は現在も進む一方、「一つ前の時代で何が起こっていたかを見ることで、未来を考えるきっかけにできないかと思った」と振り返る。構想から執筆に要したのは約10年。

70年代に登場し、現在も広告や看板に使われている「ゴナ」「ナール」と呼ばれる書体を開発した愛知県在住の書体デザイナー中村征宏さん(42年生まれ)にも話を聞いた。「あれだけの仕事をしていながら、中村さんは一度も東京で仕事をすることがなかった。自分が愛知にいないければ、取材は実現しなかったかもしれない」。出版やデザインの歴史が圧倒的に東京を中心に語られる中、埋もれかけていた担い手を地元から掘り起こした。

「普段、見たり書いたりしている文字の形は、私たちの思考にも何かしら影響を与えているはず。デザインの分野にとどまらない、誰にとっても関わりのある問題なのだと受け止めてもらえたら」。次作では絵本を軸に、戦後社会を眺めるつもりだ。(宮崎正嗣)

2024年3月15日(金) 中日新聞 15面より

この記事は中日新聞社の承諾を得て転載しています。